

知的障害者における本人活動への支援
～「本人の会」立ち上げに向けて～

薬師寺明子、杉谷 理絵、竹内 瞳、富澤 真菜
新延 優子、真壁かおる、山本 詠美、吉元めぐみ

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第55号抜刷）

報告・資料

知的障害者における本人活動への支援 ～「本人の会」立ち上げに向けて～

Supporting self-advocacy for people with intellectual disabilities:
a report of establishing a self-advocacy group

薬師寺明子、杉谷 理絵*、竹内 瞳*、富澤 真菜*
新延 優子*、真壁かおる*、山本 詠美*、吉元めぐみ*

キーワード：知的障害者・当事者・本人活動・本人の会・本人活動支援・学生

1. はじめに

「I'm tired of being called retarded—we are people first
(自分たちは、障害がある前に、人間なんです)」

アメリカのオレゴン州の当事者がオレゴンでも当事者の会合を開こうと1974年にセイラムで会合を開き、会の名称を検討しているときに出了言葉「私たちはピープルファースト (people first) です」からピープルファーストの言葉は誕生した。ピープルファーストとは、「障害者である前に人間としてあつかってほしい」ということを当事者自ら主張し、権利を守り、獲得していく活動である^{[1][2]}。

本人活動（知的障害者福祉の分野では当事者のことを「本人」、当事者活動のことを「本人活動」と呼ぶことが多い。以降「本人活動」とする）は1960年代、「権利擁護は常に当事者から出発しなければならない」という主張をもとに、スウェーデンで親の会¹⁾を母体にして生まれた^[3]。

日本の知的障害者福祉は、長期にわたり「隔離」、「収容」、「保護」といった地域から切り離されたものが主流であった。1980年代に入るとノーマライゼーションの広がりや国際障害者年等により「人権の主体としての自己決定を最大限に尊重する」^[4]ことが、

いわれるようになった。そして、2003年支援費制度の導入、2006年障害者自立支援法の施行により、施設から地域への移行が進むとともに、「利用者」としての「当事者」であることがより明確になった。しかし、これまでの歴史的背景や障害の特性から、「当事者主体」の支援は完全に実践されていないのが現状である。

本人活動は、当事者自ら企画を立て、余暇活動、レクリエーション、研修、ボランティア活動等を自主的、主体的に取り組む活動であるが、活動が進むにつれ「権利保障」を求めたり、政策への提言や参画等、発展、成長していく団体もある。当事者が集まり、個々人や、集団の力を増し、そして社会を変えていく力となるのである^[5]。

本報告では、知的障害のある当事者同士が交流を深め、エンパワメント²⁾、政策提言や社会変革につながるという本人活動の機能について学び、共感した学生たちが、実際に本人活動を立ち上げ、支援をしていく過程についての報告を行う。そして、この中で課題を明らかにし、今後の活動を継続、向上していくために検討する。

*美作大学生生活科学部福祉環境デザイン学科

2. 本人活動について

1) 本人活動意義

(1) 本人による 本人のためのグループ活動

①本人活動は本人自身が活動の主体である。そのことを本人たち自身が、また、本人たちをとりまく全ての人たちが確認することが本人活動の基本である。

②本人活動は本人のための活動、いわゆる「自分の人生を自分で生きるための」活動である。また、セルフ・アドボカシーという言葉を使うと、その意味が一層よく表現される。セルフ・アドボカシーとは「自分の権利を自分で獲得し擁護する」という意味である。「本当の自分を見てほしい」と自分を表現すること、自分たちで企画し、ものごとを進めること、「自分はこのように生きたい」と社会に訴え、社会を変えていくこと、そして政策立案に関与していくこと。本人活動は、こうした幅広い内容をもつ権利擁護のための活動である。

③本人活動はグループで行う活動である。同じ立場の仲間と出会い、孤立から脱するところから本人活動が始まる。そして活動の中で自信を深め、互いの価値を認め、成就観を共有し、社会に働きかけながら、その結びつきをさらに深めていくものである。

(2) 施設等の限られた場ではなく地域社会の中で

本人活動は施設等の限られた場ではなく、地域社会の中で行われる。施設は利用者の生活基盤そのもので、彼らは生活の根幹を施設に預けている。こうした環境では利用者の自発性と自由に基づく本人活動が健全に育つことはほとんど不可能である。これは施設職員等関係者の個人的な意識とは別に、施設が構造的にもつ限界であることを理解しなければならない。

本人活動は開かれた地域社会の中で、社会と直接関わりながら展開されるところに意味がある。そのことで本人と社会の双方が変わるのである。

(3) 自信をもち、支え合い、社会を理解し、働きかける

本人活動は知的障害のある人が孤立から脱するところから始まる。それによって得られた肯定的自己認知を基盤に、相互に支え合い、社会と自分たちの関係を

認識していく。そして人間として価値ある人生を生きるために、社会に働きかけ、変革しようと行動する。こうした活動のプロセス全体が本人に内在する力を強め、彼らの人生の質を変えていくのである。

(4) 構成員は知的障害者本人、当事者以外は支援者 知的障害者本人以外の人が関わるときは、支援者として関わる。支援者は、当事者とは異なる立場であることを認識し、支援者としての自分の立場を自他ともに明確にしたうえで本人活動に関わる必要がある。

(5) 当事者が話し合って決める

本人活動に関わるあらゆる決定は知的障害者本人が話し合いを行い、決めていく。決定の過程で支援者は必要に応じて様々な役割を果たさなければならない。支援者の姿勢と支援技術が最も問われる点である^[6]。

2) 海外の本人活動の動向

本人活動は、1960年代にスウェーデンで親の会を母体として生まれ、「権利擁護は常に当事者から出発しなければならない」という意味でセルフ・アドボカシーと呼ばれている。また、1970年代にアメリカで盛んになった本人活動は、「私はまず人間として扱われたい」という意味でピープルファースト運動と呼ばれている。知的障害者の「本人活動」はこうして2つの流れを汲んで発展していった。

まず、前者については、1960年代後半、スウェーデンの「知的障害児・者における親と本人の会」において、本人自身によるレクリエーション活動・クラブの企画・運営、そのための学習の機会等が、障害を持たないヘルパーの支援を得ながら行われ始めた。最初は、レジャー・クラブとして始まったものが、意思決定や会議を開くためのトレーニングを目的とするようになっていった。1968年スウェーデンで開催された知的障害者の親の会で、はじめて本人会議が開催された。その後、当事者たちは、本人部会を作り様々な情報を提供、当事者の意見発表を行う等、主張することを育ててきた。「知的障害児・者における親と本人の会」はその後も「グルンデン」等の当事者組織を

作り、発展させていった。その後、活動を続け、世界の当事者との交流を深めていくうちに、親や関係者への依存、従属している部分が多いため、自分たちの思いや願いが組織全体に伝わりにくいことに気づきはじめ、問題を抱えながらも1995年「知的障害者全国大会」で親の会からは独立した形での運動方針と役員の選任を行い、本人たちによって作られた当事者組織（全国本人の会）として本格的な活動を開始した。

スウェーデンで生まれたセルフ・アドボカシーの思想や実践は、ノーマライゼーションの考え方とともにイギリスやカナダでも、「自分の言葉で話したい」という知的障害者の思いが広がっていった。1973年、イギリスでの知的障害者の当事者運動を参考にしてカナダで開催された「第1回北アメリカ精神遅滞会議」に参加したアメリカのオレゴン州の州立知的障害者施設の利用者と指導員がオレゴンでもこのような当事者の会合を開こうと1974年にセイラムで会合を開き、会の名称を検討している時に出了た言葉「『知恵遅れ』と呼ばれるのもうんざり。私はまず第一に人間（people first）です」からピープルファーストの言葉は誕生した。ピープルファーストとは、「障害者である前に人間としてあつかってほしい」ということを当事者自ら主張し、権利を守り、獲得していく活動である。オレゴン州でのピープルファーストでは、600人もの参加者が集まった。その後、アメリカ、カナダ等北欧各地にピープルファーストのグループが結成された。1991年、世界ではじめてピープルファーストの全国組織である「カナダ・ピープルファースト」が誕生した^{[7] [8]}。

3) 日本における本人活動の発展過程

日本における本人活動は、1950～60年代に、青年学級³⁾や親の会、養護学校を卒業した人のOB会があった。しかしながら、こうした活動は、当事者自身が主体的に運営しているものではなかった。その活動内容は、レクリエーションが主なものだった。1980年頃から、各地の育成大会⁴⁾等で当事者の声に耳が傾けられ始め、神奈川県小田原市の親の会では本人会員が実

現した。しかし、これらは、指導者や親を中心とした運営であり、本人中心の組織運営や本人自身による取り組みが盛んになるのは、1990年以降である。

1989年、金沢で行われた、全日本手をつなぐ育成会の全国大会で本人が意見発表を行った。そして、1991年に東京大会では、準備段階からの当事者参加、企画・運営、本人の分科会が開催された。司会も当事者が行い、「私たちの願い」として全国から34人が意見発表を行った。そして、この時参加した本人によって1992年に「さくら会」⁵⁾が結成された。1994年、徳島大会では当事者たちの思いや願いを出し合い、初めて本人決議⁶⁾として発表された。この時9つの決議の中の1つに、「『精神薄弱』という呼び方を早く別の言葉に変えてください。決める時には、必ず私たちの意見を聞いてください。」という決議があり、育成会の組織名から「精神薄弱者」という言葉が削除されるに至った。こうした動きは、全国大会だけでなく、県大会等でも毎年、本人決議文を発表している。

また、1993年、第3回ピープルファースト世界会議（カナダ）に当事者約20名を含む、総勢80名が日本から参加した。そして、参加した人々の多くが、各地の研究会に招待され、ピープルファーストのことを語ってきた。日本では、この国際大会に参加したメンバーによって1994年以降、知的障害者全国交流集会、後のピープルファースト大会が開催されている。これ以降、1995年、東京大会から毎年継続して、実行委員会を作り活動している。

1997年、岡山で行われた全日本手をつなぐ育成会全国大会本人部会において「本人決議」、静岡で行われた知的障害者全国交流会（ピープルファースト）において「ピープルファースト宣言」を出している。

1999年、札幌で行われた全日本手をつなぐ育成会全国大会本人部会では、インクルージョン・インターナショナル国際セルフ・アドボカシー委員長のロバート・マーティンが講演で「社会は自分たち障害者をまるで本物の人間ではないかのように扱うのを、もういい加減にやめるべきだ」と主張した。この年、全日本手をつなぐ育成会は「本人活動支援99」マニュアル

を作成した。さらに、2000年度から本人活動支援委員会を本委員会として独立強化し、また、本人部会運営委員会を全国の本人の会に位置づけた。2000年度「本人部会（奈良）」大会では、「本人部会」を「本人大会」と改め、手をつなぐ育成会全国大会から独立性をより強めた。一方同年、ピープルファースト東京が幕張で開かれ、約800人が参加した。「知的障害」という言葉の是非について当事者間で真剣な議論がなされた。

2001年、東京で行われた「本人の会」では、「21世紀の本人活動」をテーマとして育成会本人大会運営委員がシンポジストとなりシンポジウムを行った。

2002年、青森で行われた「本人の会」では、支援費制度と新障害者計画策定にあたって意見を述べた。同年、熊本で行われたピープルファースト大会では、支援費制度についての行政専門官による説明等が中心であった。

2003年、滋賀で行われたピープルファースト大会には約1100人が参加し、「サングループ事件について」⁷⁾「事件をなくし、人権を守っていこう」等のシンポジウム行われた。同年5月から「障害者（児）の地域生活支援のあり方に関する検討会」が開催され、育成会の本人活動のメンバーとピープルファーストの代表が発言した。また、本人活動委員会は「仲間にあいたい」という本を作り、全日本手をつなぐ育成会から発行した。

2004年、障害者自立支援法案への取組みにおいて、ピープルファーストは、他の団体と共にいち早く反対運動を行った。また、2004年度から知的障害者本人が自分に自信を持ち、仲間と話し合い、自分たちの権利や自立のために社会に働きかける等の活動を支援する「本人活動支援事業」が始まった^{[9] [10]}。

3. 本人活動支援についての学び

1) 本人活動支援を始めるまでの経緯

本学福祉環境デザイン学科3年次開講科目である「特別演習Ⅰ」において、知的障害者の本人活動の機能として、「当事者同士の交流を深める」、「エンパ

ワメント」、「政策提言や社会変革につながる」等を学習した。そして、地域の中で孤立した人や、外に出る機会のない人が多い、職場や学校等社会の中で居場所がない人がいるという現状を知った。また、学生が津山市にある地域活動支援センターに行った際、相談支援専門員から「県北に当事者組織はあるが、会員が一人で活動がなされていない」という話を聞き、県北には当事者同士が交流できる場が少ないという現状も知った。以上の学習や、地域の現状を知る中で、学生として何ができるかを考え、本人活動である「本人の会」を立ち上げることとなった。

学生が支援者として本人活動を行うことの意味として、「親や支援者ではなく、支援する側、支援される側という位置づけが曖昧である」、「学生であるため、家庭や就労先、サービス等で困っていることを話しやすい」等が挙げられ、「指導者」という立場には陥りにくいと考えられる。

2) 本人活動支援についての学習

主な内容は、「本人活動」「本人の会」、「海外での本人活動の取り組みについて」、「日本の本人活動の取り組みについて」等であった。

3) 先進的な本人活動への視察

(1) 「大阪ともだちの会」への見学（2009年6月）

後述するように、2008年12月から実際に本人活動である「本人の会」を始め、学生たちが当事者を支援していく中で、当事者が主体となって活動を進めていくことの難しさを感じ、支援方法が課題として挙がっていた。また、当事者も「本人の会」がどのようなものなのかイメージができていない様子も見受けられた。そこで、すでに活発に本人活動を行っている「大阪ともだちの会」へ学生及び教員で視察に行き、「本人の会」の活動内容、支援者の支援方法等について直接学び、活動に活かしていくことにした。

「大阪ともだちの会」は1998年4月に創設され、2009年10月現在46名が登録している。当日の参加人数は30名、役員9名、支援者4名であった。活動内容は

以下の通りである。

まず、「本人の会」が始まる前に役員会が行われた。役員会では、本人たちがその日の活動内容を確認し、わからない点を本人同士で確かめ合う。その後、その日の活動であるグループディスカッションが「生活」と「仕事」というテーマで行われた。

役員は積極的に発言をしており、役員としての自覚があるようであった。支援者は輪の中には入らず見守り、進行役や物事の決定には参加せず、外側から当事者が困った時にアドバイスをしていた。グループディスカッションでは、当事者である司会者が一人一回は必ず意見を言えるように配慮していた。

参加者は職場や生活の中で抱える問題について話し、そのことについて、一人一人が自分の意見を持ち、グループディスカッションを行うことにより、他人の悩みや意見を共感し、自分の気持ちを確認できているようだった。



写真1 「大阪ともだちの会」の活動の様子

(2) 「大阪知的障がい者福祉大会」への参加

(2009年9月)

「大阪ともだちの会」への見学の際、「大阪知的障がい者福祉大会」の「本人大会」について紹介され、学生も参加することとなった。「本人大会」は当事者が中心となって計画しているものである。

内容は、「楽しむ」、「はなす・まなぶ」、と希望者によって会場が分かれ、「楽しむ」では、クイズや工作、大道芸、ダンスや音楽等を実施。また、「は

なす・まなぶ」では、午前中「生活のこと、将来のこと、趣味のこと」について話をし、午後からは「ともだちづき合いのこと、結婚のこと」について学び、「将来・友達・結婚」についてディスカッションが行われた。学生はディスカッションを見学した。ディスカッションでは意見が活発に交換され、普段の生活の様子や悩み、結婚に対する意識等について知ることができた。当事者が中心となって計画しているため、企画構成や部屋の表示が分かりやすく、誰もが楽しめる内容となっていた。また、支援者は当事者が発言しやすい雰囲気を作りだすため、困っているときや発言に詰まっている時だけ声をかける等の配慮のある支援を行っていた。

この本人大会に参加し、本人が主体となるような支援方法を学ぶことができた。



写真2 大阪知的障がい福祉大会の様子

4. 学生による本人活動支援の実践内容

本人活動支援は2008年12月に本人活動を知ってもらい、参加を呼びかけるためのクリスマス会から始まった。以降、毎月1回活動を行っている。(表1)

1) 当事者への宣伝・啓発活動

「本人の会」を立ち上げるにあたり、多くの当事者に本人活動について知ってもらい、参加してもらうことを目的として、レクリエーションを中心としたクリスマス会を計画した。津山市内とその周辺地域の障害者福祉施設や作業所等を回り、チラシやポスターを配

表1 学生による本人活動支援の実践内容

開催年月日	活動内容	参加者数	具体的活動内容
2008.12.23	クリスマス会	11名	自己紹介・レクリエーション・ケーキ作り・今後の活動についての話し合い。
2009.1.20	勉強会	4名	海外の知的障害者当事者会の歴史・活動内容について学生が説明。
2009.2.25	勉強会	3名	内容は前回同様。内容が難しかったため、理解できるように工夫をして説明。
2009.3.23	勉強会	4名	日本の知的障害者当事者会の歴史・活動内容。当事者と次回の活動を計画。
2009.4.12	お花見会	3名	美作大学付近の公園でお花見・レクリエーションをした。
2009.5.3	本人の会チラシ	2名	本人の会のチラシ作成。
2009.5.12	本人の会チラシ作成	1名	前回の続き・配布先の検討及び依頼（配布先：青年学級・地域活動支援センター・作業所等）。
2009.6.6	研修会	4名	当事者が本人の会の説明・これまでの活動を報告。当事者自ら人前で話すのは初めてだったが、これまでの活動を分かりやすく説明していた。
2009.7.10	大阪ともだちの会報告会	3名	大阪ともだちの会の報告（パワーポイントを利用）。当事者から「交流してみたい」等の感想があった。
2009.7.20	今後の活動について検討 BBQ準備	2名	今後の活動について話し合いBBQのチラシ作りと配布先の検討と依頼。 (配布先：津山市内の青年学級・社会福祉協議会・当事者の就業場等)
2009.10.3	BBQ交流会	7名	BBQの買出し・準備・片付けを分担して行った。参加者は20歳前後の方、誕生寺養護学校の生徒が多かった。保護者の方から次回の活動も参加させて欲しいという声があった。
2009.10.30	知的障がい者大阪大会報告	4名	知的障がい者大阪大会の報告。当事者が興味を示し、質問等も多かった。

布して呼びかけを行った。結果、10名の当事者と1名の支援者が参加した。そこで交流を図りつつ、参加者のニーズ把握を行い、「本人の会」の必要性を改めて感じ、本格的にメンバーを集めることとなった。

活動を進めていく中で、参加メンバー（「本人の会」に参加している当事者たちのこと。以降「参加メンバーとする」）から「もっと参加者を集めたい。」という声があった。学生は支援者として、参加メンバーに活動内容を考えられるよう支援し、チラシの作成を働きかけた。また、参加メンバーが自ら、津山市の青年学級や各々が利用している障害者施設で作成したチラシを配布し、啓発・宣伝活動を行った。そして、参加メンバーが中心となり計画し、啓発・宣伝活動を行ったバーベキュー交流会には多くの当事者が参加した。参加メンバー自らが啓発活動を行うことにより、意識が高まったようであった。



写真3 クリスマス会レクリエーション



写真4 クリスマス会ケーキ作り

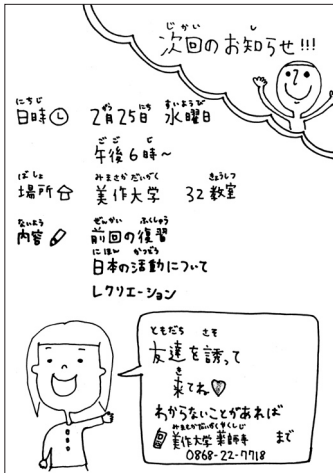


写真5 学生が作成したチラシ

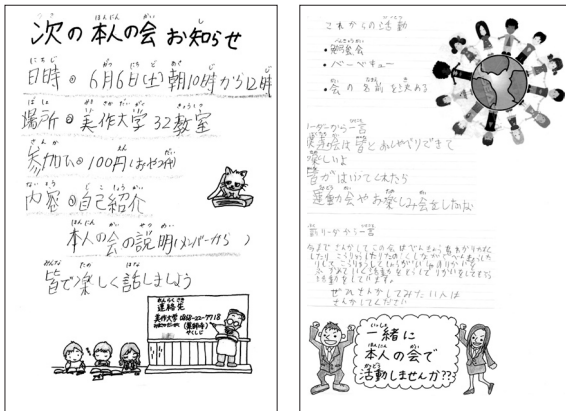


写真6 当事者が作成したチラシ

2) 勉強会

参加メンバーが、本人活動を進めていくことへの意味を理解した上で「本人の会」に参加してもらうために、「本人の会」についての勉強会を開催した。勉強会では、これまでに行われている本人活動の実際や本人活動が果たす役割等について学生が主体となり説明した。当事者に理解してもらうために、配付資料や説明の方法を工夫し、勉強会を進めた。

内容は海外や日本でされている本人活動の歴史や活動内容である。初回の勉強会は学生たちも初めてであり、理解できる説明方法が分からず、戸惑うこともあった。終了後、参加メンバーから「難しかった、分

からなかった。」という意見があがった。反省を踏まえ、もう一度同じ内容で勉強会を行った。2回目以降はホワイトボードに文字や図、絵を掲示、パワーポイントを活用する等、参加メンバーのペースに配慮して説明した。

勉強会を始めた当初は、学生が参加メンバーに意見を求めることが多かったが、次第に参加メンバーから自発的に意見が出るようになった。また、参加メンバーの困っていること等について話し合う機会を設けた。

3) 季節行事・レクリエーションの支援

参加メンバーから季節行事やレクリエーションの希望があり、お花見会等季節に合わせた活動を参加メンバーが中心となり計画、実施した。また、メンバー同士の交流を図る目的でレクリエーションも行った。

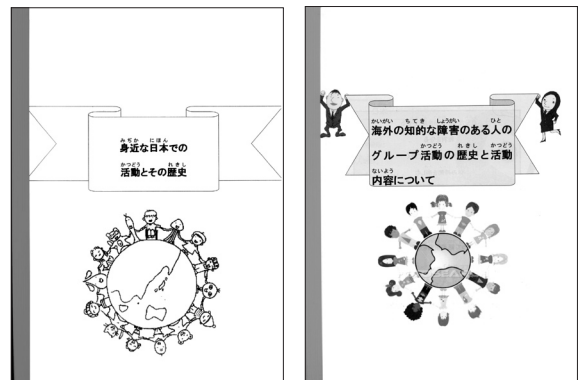


写真7 勉強会資料①

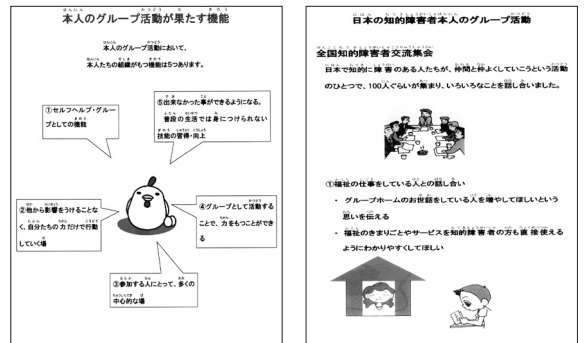


写真8 勉強会資料②

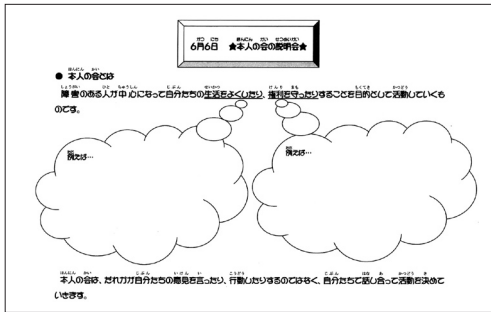


写真9 勉強会補足資料



写真10 お花見会

お花見会は、大学近くの公園で昼食、レクリエーションを行った。少人数ではあったが、大変盛り上がった。また、バーベキュー交流会は必要物品や当日の内容についても参加メンバーが中心となり計画を立て、チラシを作り、参加メンバー自ら宣伝活動を行った。その効果があり、初めて参加する当事者も多くいた。買い物や食材の下準備等も全員で行い、食後のレクリエーションは大変盛り上がった。そして、このバーベキュー交流会をきっかけに新しいメンバーも加わった。これらの季節行事やレクリエーションの回数を重ねていく中で交流が深まり、参加メンバーからの希望が多く聞かれるようになった。

4) 報告会

先に述べた「3. 本人活動についての学び 3) 先進的な本人活動への視察」にあるように、学生及び教員が先進的に活動している「本人の会」を視察し、参加メンバーに内容を報告した。内容は大阪本人活動である「大阪ともだちの会」の見学、「知的障が者大阪大会」に参加し、運営の方法、取り組み内容、実際に見学、参加した時の内容についてである。報告する際は、視覚的に伝わりやすくなるよう配慮し、パワーポイントや写真を用いて説明した。参加メンバーは内容に興味を持ち、「行ってみたい」「大阪ともだちの会の方と交流をしたい」等、積極的な感想が挙がった。

5. まとめと課題及び今後の展望

1) まとめと課題

知的障害者の本人活動を当事者である参加メンバーと学生支援者が共に活動し、参加メンバーの本人活動への想いや希望を表出することができた。活動に参加したいという希望もあるが、「本人の会」の活動内容についての話し合いの際に、意見や希望が徐々に出てくるようになった。また、さまざまな状況にある参加メンバーが一同に会することで、自分以外のメンバーの生活状況や、就労の状況等も知ることになり、そのことが、自分自身を振り返る機会にもなったようである。

また、学生による本人活動支援は、支援者側の考えや思いを押し付けることが少なく、参加メンバーの意見が表出するまで、待ち、意見を出すまでの支援、意見の汲み取りが上手にできているようであった。支援経験者とは異なり、当事者としてより対等な立場で支援を開始することができたようである。

しかし、これまでの活動から、いくつかの課題が明らかになった。課題について以下に挙げる。

(1) 参加メンバーが集まりにくい

多くのメンバーが参加できやすいように、日程についても配慮を行った。日中仕事をしているメンバーや、週末に福祉サービスを利用したり、休日に仕事があるメンバーもあり、活動は主に平日、18:00から「本人の会」を開催した。しかし、参加メンバー全員の要望には応えられず、メンバーはなかなか増えなかった。また、交通の便が悪いため、公共交通機関を利用して大学まで来ることが難しいというメンバーもいた。他にも、送迎等で保護者の負担が大きい場合もあった。

(2) 本人活動の本来の目的・意味が伝わりにくい

本人活動の目的は、本人主体であり活動は本人同士が話し合っ て決めていくものである。しかし、参加メンバーは、これまでの社会生活の中で自分の意見を表現するという機会も少なく、「本人の会」立ち上げ当初は、活動にも慣れておらず、意見も出にくかった。そのため、参加メンバーが主体となって活動を進めていくことはとても困難であった。こうした状況から、当初は支援者である学生がある程度、活動内容を決めたり、意見を出す等、本人活動の「本人主体」の機能を果たしていくことが困難であった。しかし、回数を重ね、参加メンバーも活動に慣れてくると参加メンバーからの意見が出てくるようになった。また、学生も活動を重ね、先進的な活動をしている団体への視察等を通し、支援方法の学習を深め、徐々に支援方法を体得しているようであった。

2) 今後の展望

先に述べた課題から、まず、開催日の調整が重要である。定期的な活動以外にも行事やレクリエーションを行う際に、日程の折り合いをつける必要がある。

また、津山市街地及び周辺地域の交通の便にも配慮する必要がある。本人活動の取り組みが盛んな主な地域は交通の便がよく、家族や支援者からの送迎の支援はあまり必要ではない。今後、行動援護⁸⁾や移動支援事業⁹⁾等のサービスを利用して本人活動に参加できるよう地域自立支援協議会¹⁰⁾や地域の相談支援事

業¹¹⁾等の協力を得、連携をとっていくことが必要である。

これまで自分の意見を表現する機会の少なかった当事者が力をつけていくためにも。この本人活動はとても重要であると考ええる。本人活動を通して、自信を深め、互いの価値を認め、成就観を共有し、社会に働きかけながら、その結びつきをさらに深めていくのである。そして、相互に支え合い、社会と自分たちの関係を認識し、人間として価値ある人生を生きるために、社会に働きかけ、変革しようと行動する。こうした活動のプロセス全体が本人に内在する力を強め、彼らの人生の質を変えていくのであり^[11]、そのような支援を実践していくことが必要である。そのためにも、今後は支援者としての学生が支援方法や技術を学び、体得していくことが重要であると考ええる。

今後、この本人活動が定着し、津山市とその周辺地域の知的障害のある人々が気軽に集え、交流を深め、力を得られる場所になっていくことが望まれる。参加メンバーが積極的に、意見を出し、「本人の会」を運営していけるように、支援者である学生の支援の力や社会資源とつなぐ力が得られるよう学生、教員共々学びを深めていきたいと考える。

註

- 1) 「親の会」とは、障害児(者)をもつ親組織のことである。
- 2) 「エンパワメント」とは、社会福祉援助活動(ソーシャルワーク)において、利用者、利用者集団、コミュニティなどが力(パワー)を自覚して行動できるような援助を行うこと。利用者などの主体性、人権等が脅かされている状態において、心理的、社会的に支援する過程をいう。その目的は、脅かされている状態に対して、利用者、集団、コミュニティ等が自律性を取り戻し、その影響力、支配力を発揮できるようにするところにある。1980年代以降、アメリカ、イギリスを中心に発展してきた手法であるが、現在では社会福祉援助活動の動向として根づいてきた。
- 3) 「青年学級」とは、15歳以上の知的障害者を対象に、スポーツ、料理、音楽、キャンプ、合宿、美術等の趣味の教室等を通し、当事者同士が余暇を共にすると共に、交流を

深める活動である。知的障害者の中には余暇を過ごすことが苦手な人もおり、多くは当事者の親たちが、子どもの余暇の充実のために作った。

- 4) 「育成大会」とは、知的障害児(者)の親の会の大会である。社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会は、3人の母親が、全国の仲間の親たちに、手をつなぎ施策の充実を求めよと呼びかけて始まった。その呼びかけに答え、親や関係者が立ち上がり、47都道府県すべてに「手をつなぐ育成会」が結成され、その連合体が「社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会」である。育成大会は、全国、地方、都道府県大会と開かれている。
- 5) 「さくら会」とは、1990年パリで開催された ILSMH (現在の II) 世界会議に、知的障害をもつ本人5名が参加し、その後、パリ大会の参加者を中心に、関東で発足した本人の会である。発足当時、①楽しくなかよく友だちをつくろう ②仕事のなやみを話しあおう ③結婚について考えよう ④親にたよらないでも生活できる制度を考えよう ⑤一般の人に「障害」を理解してもらおうを会の目標に掲げた。
- 6) 「本人決議」とは、全日本手をつなぐ育成会全国大会の本人部会(本人が参加する分科会。2000年頃から「本人大会」と改称)で検討され、大会2日目の全体会で発表される本人の決議のことである。企画などに本人が参加し始めたのは第43回徳島大会(1994年)からで、本人部会で話したことをまとめ、最終日の全体会で本人決議を発表するパターンが以降継続されている。
- 7) 「サングループ事件」1996年5月、知的障害者を多数雇っていたサングループ(倒産)の社長が従業員の障害基礎年金計1430万円を着服した疑いで逮捕され、虐待も明らかになった事件である。栄養失調や薬による発作で死亡した従業員もいた。
- 8) 「行動援護」知的障害又は精神障害により行動上著しい困難を有し常時介護を要する障害者(児)に対し、行動する際に生じ得る危険を回避するために必要な援護、外出時における移動中の介護、排泄及び食事等の介護その他の行動する際の必要な援助を行う障害者自立支援法による給付対象サービス。介護給付に分類される(障自立5条4項)。
- 9) 「移動支援事業」屋外での移動が困難な障害者(児)について、外出のための支援を行う事業。障害者等の地域における自立生活及び社会参加を促すことを目的としている。障害者自立支援法の市町村地域生活支援事業の必須事業の一つ。移動支援をすることにより、社会生活上

必要不可欠な外出及び余暇活動等の社会参加のための外出時の移動を支援する(平18障発0801002)。

- 10) 「地域自立支援協議会」相談支援事業をはじめとする地域の障害福祉に関するシステムづくりに関し、中核的な役割を果たす定期的な協議の場として市町村に設置される組織、地域の実態や課題等の情報を共有して、具体的に協働するネットワークであり、メンバーは、相談支援事業者、サービス事業者、保健医療・教育・雇用関係機関、企業、障害者関係団体等で構成される(平18障発0801002)。
- 11) 「相談支援事業」障害者(児)が地域でさまざまな社会資源を活用しながら、自立した日常生活または社会資源を営むことができるよう、相談、情報提供、サービスの調整等を障害者等のニーズに合わせてコーディネートすること。相談支援事業者には地域生活支援事業として実施される、障害者等、障害児の保護者または介護者からの相談に応じた情報の提供や指導、市町村やサービス事業者との連絡調整及び、権利擁護に必要な援助等と、指定相談支援事業者により個別給付として支給決定障害者等に対して実施される、サービス利用計画の作成(指定相談支援)の2種類がある(障自立5条17項)。

参考・引用文献

- [1] 穂積功一「知的障害者の本人活動の歴史的発展と機能について」『吉備国際大学社会福祉学部研究紀要』第12号、11-22、2007。
- [2] 佐藤久夫他「障害者と地域生活」中央法規出版、14-15頁。
- [3] 前掲書1)。
- [4] 室津滋樹他「障害のある人の地域の暮らしを支えるスタッフ・世話人のためのグループホーム援助のポイント 詳細版」平成19年度厚生労働省障害者保健福祉推進事業(障害者自立支援調査研究プロジェクト、4-8頁。
- [5] 前掲書1)。
- [6] 大槻美香他「本人活動支援 '99」社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会、1999。
- [7] 前掲書1)。
- [8] 前掲書2)。
- [9] 沖倉智美他「本人活動支援 2004」社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会、2004。
- [10] 前掲書1)。
- [11] 前掲書6)。